

## 《シンポジウム I》

## 臓器移植における核医学の役割

## 司会のことば

川 村 壽 一 (三重大学医学部泌尿器科)

W.N. Tauxe (ピッツバーグ大学核医学)

本シンポジウムは移植の対象になる心、肺、肝、腎、骨髄を一堂に集めて、臓器移植という治療法において核医学の果たす役割を論ずるものである。現在、臓器別に専門化されすぎた核医学的手法が移植を介して再編成されたものと考えられ、現行の核医学の“miniture 版”というべきものである。

当初、わが国の臓器移植における特異的状況から、その対象が腎移植のみに限られて、本シンポジウムの成立はむずかしいと考えられた。しかし、北米における臓器移植のメカともいべきピッツバーグ大学から核医学チームの応援をえて、腎に限らず欧米における現行の移植臓器を対象にした核医学的検査法を討論する機会が与えられた。Dr. Tauxe から寄せられたピッツバーグ大学グループとしての抄録内容では、前半は司会者としての臓器移植への核医学のかかわりの総論であり、後半は移植臓器別に核医学的検査の適応と問題点を整理した各論である。

各移植臓器については特別な術後の病態といえるが、核医学検査法の適応という点からはそれぞれの臓器に対してわれわれが通常行っている手法と本質的には変わりはない。核医学検査法による

各移植臓器に共通した評価項目として次のものがあげられる。

- 1) 臓器の保存と viability
- 2) 臓器の血行動態
- 3) 臓器の分泌機能
- 4) 臓器の排泄機能
- 5) 手術手技の判定
- 6) 拒絶反応
- 7) 感染、その他の副作用
- 8) 薬剤の副作用

もちろん、臓器によっては共通項は必ずしもないかもしれないが、移植後の臓器特異性を考えつつ、これらの項目に対する核医学的検査のもつ役割を検討したい。そして、ピッツバーグ大学からの発言に大いに耳ををかたむけていただいて、会場からもこのシンポジウムに参加してほしい。

終わりに、本シンポジウムのために、昨年にひきつづいてピッツバーグ大学の同僚を伴って来日される Tauxe 先生に感謝したい。また、本シンポジウムの企画に際して、ご助言いただいた濱本研(愛媛大)、中川毅(三重大)、小西淳二(京大)の各教授に感謝する。